

## 校長室の窓から

令和3年2月1日（月）

先週、1月29日（金）、佐賀新聞の「巣立つ」で今年度の厳木高等学校卒業予定者53名を代表して、井手将隆君以下7名の生徒が紹介されました。いずれも学業、部活動、生徒会活動など様々な分野において学校内外で活躍するなど、新厳木高校1期生として3年間学校を牽引してくれてくれた本校自慢の素晴らしい生徒たちです。

今年度卒業する生徒たちの中には、全県募集枠で入学した生徒たちもいます。中学生の時不登校経験を持っていた生徒たちや発達障害の特性を持つ生徒たち、また、遠方からJRを乗り継いで3年間毎日通ってくれた生徒たち。そうした生徒たちが本校の特長的な学習活動である体験的な学習の時間や学び直しの学習、また生徒の興味関心に応じた様々な選択科目の開設などの学習機会をとおして心身ともに大きく成長し、就職や進学の進路先が決定し、立派に本校を卒業していくことは、校長として大変嬉しく思います。

生徒たちが本校で過ごした3年間には、楽しいことや嬉しいことばかりではなく、時にはつらいことや苦しいこともあったことと思います。しかし、学校生活をとおして多くの友人たちと出会い、友人と作った様々な思い出はきっとかけがえのない大切な宝物だと思います。

一方で、昨年末以来、世界的に大流行した新型コロナウイルスは、現在も衰えるどころか、ますますその勢いを増しているようにも思えます。この新型コロナウイルス感染拡大が学校生活にもたらしたインパクトは非常に大きく、生徒たちの日常を一変させるほどの1年間でした。国の緊急事態宣言を受け全国の学校が一斉に臨時休校となり、突然、本校の生徒たちからも「日常」が奪われる事態となりました。その後、学校は再開したものの、部活動や授業での活動が制限される中、マスク着用や手指消毒を徹底すること等で感染拡大防止に力を尽くしました。それでも春の甲子園大会の中止に続き、全国インターハイ、九州総体、県高校総体まで中止となるなど、これまで当たり前と思っていた「日常」が、当たり前ではなかったという現実を突きつけられた一年間でした。

そのような時に多くの関係者の尽力によりSPP杯が開催され、本校の3年生たちにも最後の舞台を与えていただくことができました。参加することができた生徒たちは「日常」の、「当たり前」のありがたさを心の底から感じ、関係者の尽力に感謝したのではないかと思います。

このように辛く大変な1年間を過ごし、それを乗り越え、間もなく厳木高校を巣立っていく生徒たちですから、これから迎えるかもしれない人生における試練に対しても、きっと逃げることなく正面から向き合い、必ずや乗り越えてくれると信じています。そうして5年後、10年後、卒業生が顔を合わせた時には、「あの頃はいろいろあって大変だったけど、俺たちって頑張っていたよな。」と笑って話せる、そんなアフター・コロナの社会を築いてくれると思います。

卒業生のみなさん、卒業おめでとう。これからみなさんが歩いていく道では、何度も分かれ道に遭遇することでしょう。判断に迷えばだれかに相談するのも良いでしょう。でもあなた自身の人生です。最終的には自分で判断をして、自分の未来を切り開いていって下さい。みなさんの将来に幸多からんことを心から願っています。

